随筆

『日講記聞』という本

中西淳朗●鶴見区

ニッコウキブンと読むが、『日講紀聞』という本もある。紀聞と書く方は、英医のW.ウィリスの口述の訳文である。従ってウィリスが東京、鹿児島で講義した内容である。

記聞の方は、明治初期に来日したオランダ人の講義を中心に訳官（医師）が日本語に翻訳筆記したもので、大学東校や大阪医学校から出されたタテ書き和綴本である。

『日講記聞』は、A.F.ボードウィン、C.J.エルメレンスのそれぞれの講義からなり、前者が①生殖器病（明治２～３年）、②神経篇・消化器篇（明治２年）、後者が、１．薬物学、２．産科学、３．原病（内科病理）学、４．皮膚病論を出している。

ここで取りあげるのは、４の皮膚病論である。

というのも、この本はエルメレンスの講述を基にしていないからである。大阪の篤志解剖（芸妓・若鶴）をはじめて行った岡沢貞一郎が緒言を書いている。意訳して示す。

“本年教師エルメレンス氏、満期となりやがて和蘭に帰らんとす。（中略）来春の再遊を固く約し４月１日に帰国の途についた。ここにおいて大阪公立病院長高橋正純氏（長崎の精得館医学校でポンペに学んだ。明治６年より院長）が教師に代わり診療の他、米医グロス氏の外科書を用いて毎土曜日に皮膚病を講義した。しかし生徒は筆記に不なれの者が多いとみて、暇を利用して翻訳した。私に校訂を命じて印刷して生徒にくばって講義した。グロス氏は外科に長じ経験に富んでいるので、外科医に崇慕されている。今、之を私するに忍びず院長に乞うて、日講記聞の名をかかげて同志に示すこととした云々。”

即ち、エルメレンスの講義録ではないのに、日講記聞のレッテルをはったことを明らかにしている。明治７年当時、皮膚科用語は耳新しく、生徒は講義中筆記できなかったことも判明したのである。

この本の内容を、目次でみてみよう。

１．丹毒、２．疔瘡（一名石疔）、３．よう疽、４．壊死及び眠瘡（乾性壊疽）、５．火傷、６．凍瘡及び凍冷。

つまり、膿皮症の一部と壊死を来す疾患の代表的なもので、真菌感染症、湿疹類等を欠いている。従って、原本のグロス氏の『外科学』を筆者は未見であるが、この本の皮膚の章の翻訳がなされたことは、緒言にある通りである。時代の要請に従い生命に影響を及ぼす疾患をまず取り上げたのである。

古医書購入の時には、このような知識（タイトルと内容が異なること有り）も必要とするので、あえて筆をとった次第である。

（終）

大昔の話（Ⅱ）

＊

老祥樹

明治29年（1896年）、吾輩は30歳になった。正月は中根家に招かれ、歌留多や福引などを楽しみ、鏡との婚約も成立し、杉山に帰った。帰ってしばらくすると菅虎雄[11]の勧めで第五高等学校（旧制五高、現熊本大学）に赴任することになった。月給は100円だった。4月に松山（三津浜）を離れ、高浜虚子[15]と共に宮島に1泊し広島で虚子と別れて門司、博多、久留米などに泊り、熊本の菅の離れに落ち着いた。暇だったので樋口一葉の『たけくらべ』を読み、素晴らしいと思った。学校では週8時間『フランスの革命』のほか『ハムレット』『オセロ』などを講義した。5月に光琳寺に家を借り、菅の離れから移り住んだ。

家賃は8円で、玄関に続いて10畳、4畳の居間のほか湯殿と板間があり、離れとして6畳と2畳があった。英語の主任は佐々間信恭だったが、噂では前任者のラフカディオ・ハーン（小泉八雲）を追い出したとの事だったが真偽は分からない。6月になって中根重一と鏡が熊本に来て、吾輩と鏡は離れの6畳の間で結婚式を挙げた。

ささやかな結婚式で費用はしめて7円50銭で鏡20歳、吾輩は30歳だった。月給100円のうちから製艦費に1/10、貸費の返済7円50銭、実父直克に10円、姉に3円を送り、吾輩の本代に20円は必要だったので生活費は50円位だった。まあまあの生活だ。7月に吾輩は正式に教授（高等官6等）になったが、月給は変わらなかった。寺田寅彦[20]が高知から五高に入学して来た。熊本の夏は暑くてたまらなかった。秋になり涼しくなったので妻の鏡と北九州を旅行し、俳句を多く詠んで、正岡子規[5]に送った。吾輩はこの頃俳句に熱中し、『七部集』『故人五百題』などの俳書をとり寄せて食事中にも熟読するほどだった。鏡の悪阻（つわり）がひどい。

吾輩も少々うつのようだ。教師を辞めて上京してなにか他の職に就（つ）こうと考えて義父中根に相談したが駄目だった。虚子の俳話を読み感心する。立花銑三郎がダーウィンの『種の起源』を翻訳し刊行された。

明治30年（1897年）、吾輩は31歳になった。熊本に来ての初めての正月を迎えた。年始客4、5名、生徒も5、6人来る。妻は馴れていないので大慌てであった。「ホトトギス」が創刊された。B6判、35ページで定価は6銭で300部発行された。春になって『トリストラム・シャンデー』を脱稿した。春休みを使用し吾輩は病気療養中の菅虎雄を見舞い、久留米の高尾山に行き発心山の桜を見物した。古道具屋で軸を買い子規に送った。

この見聞は後になって『草枕』に書いた。義父中根を介して東京高等商業学校（現一橋大学）校長から年俸1000円でどうかと招聘されたが五高への義理と山川信次郎[14]への信義のため断った。しかし吾輩は東京へ帰りたいと思う希望と、文学で立ちたい意思がだんだん強くなった。仙台高等学校（現東北大学）への転職の話もあったが断る。5月に米山保三郎[6]が急性腹膜炎で死んだと連絡があった。敬愛していたので大いに悲しかった。6月には京都帝国大学が新設され、これまで唯一の帝国大学は東京帝国大学と改称され、帝大が東京と京都の2つになった。

実父直克が死亡との電報が届いたが、たまたま学年試験だったので帰る事が出来なかった。夏休みに妻を伴って上京し、義父宅に宿泊し、しばしば子規を見舞った。当時読売新聞に連載されていた尾崎紅葉の『金色夜叉』、樋口一葉の全集、広津柳浪の『今戸心中』などを読んだ。『金色夜叉』には余り感心しなかった。しかし読売新聞はまだ熊本にはなかったので毎日送って貰う事にした。狩野享吉[9]にも会い、東京帝大の新卒業生赤木通弘を吾輩の居る五高に招きたく交渉する。吾輩は不覚にも妻が妊娠しているのを知らなかった。妻は熊本からの長い汽車旅行のためか流産してしまった。静養を兼ねて鎌倉材木座の大木伯爵の別荘を借りた。鶴岡八幡宮、長谷観音などを見たりしてゆっくり過した。9月初旬に妻を中根家に預けたまま熊本に1人帰った。大江村に転居した。家賃は7円50銭だった。五高の学生俣野義郎が書生として住み込んだ。彼はのちに裁判

官になった。10月の五高開校記念日に教員総代、教授夏目金之助として祝辞を読んだ。（その祝辞の一部は現在でも熊本大学校庭の石碑に刻まれている）。この頃、実父直克への仕送り（月10円）もなくなり、貸費返済（月７円50銭）も完済したのでやっと経済的にはやや余裕が出て来た。

10月末になって妻、鏡が熊本に帰って来た。

福岡、佐賀両県に出張し、主な中学校の英語授業を視察したのもこの頃だった。暮になり狩野享吉[9]の仲介で赴任していた赤木通弘が教職に耐えられないと辞任を申し出て来た。

吾輩は止むを得ず、赤木を解任し、狩野に彼の代わりに五高の教授になってもらえないかと手紙を出した。すると狩野から就任するとの電報をもらって一安心した。この年の暮から正月にかけて山川信次郎[14]に誘われ荒尾山、熊ノ岳などを経て前田覚之助（案山子）別荘で年を越した。この旅行はのちに『草枕』の素材になり、那美のモデルは前田案山子の次女だ。東京では娘義太夫が爆発的に流行、当時の文部大臣から学生の義太夫の出入り禁止令が出たそうだ。

明治31年（1898年）、吾輩は32歳になった。狩野から借金（15円）を申し込まれた。子規が『歌よみに与ふる書』を発表し和歌革新運動を始めた。吾輩は頼もしく感じた。狩野が正式に五高の教頭として赴任し、学期末試験が始まった。

寺田寅彦[20]が高知県出身の数名の学生の試験の点数が悪いので、どうにかして欲（ほ）しいと頼みに来た。妻、鏡はヒステリー気味になっていて、ある早朝に自宅附近を流れる白川に投身自殺を企てた。幸い漁夫に救われ、舎監浅井の奔走（ほんそう）で内輪に収ったが本当に驚いたし実に困った。その後坪内町に転居し、妻も落着き、転居を喜んだ。夏休みに狩野、山川ら５人と小天温泉に遊び、前田案山子の本宅を訪ね、前田家次女卓子に再会した。秋になると寺田寅彦が俳句20～30句を持って来たので批評を与えると喜んで、それから毎週数回来るようになった。そこで寅彦、白仁三郎（のち坂元雪鳥[21]）らに俳句を教え連座を開く事にした。妻、鏡のヒステリー症状と悪阻がひどく、吾輩を大いに悩ませたが暮になりやっと収り一安心した。この頃は連座が流行（はや）り、句稿は「ホトトギス」「日本新聞」に投稿した。「ホトトギス」は発行所が松山から東京に移り、高浜虚子[15]を発行人として、子規が主宰する事になった。義父中根重一は大隈重信内閣の退任のため貴族院書記官長を辞任した。

暮にアメリカから蒸気自動車が輸入されたそうだ。

明治32年（1899年）、吾輩は33歳になった。元日の屠蘇（とそ）を祝ってから北九州を旅した。宇佐八幡宮、羅漢寺、本耶馬渓、大石峠を越えて、守美温泉に泊り、久留米に出て熊本に帰った。

狩野享吉が一高校長になり熊本を去ったので吾輩は淋しい思いひとしおだった。４月には郵便葉書１銭５厘、封書２銭になった。５月31日に長女が出生し、筆と名付けた。妻、鏡が字が下手だったので、吾輩は字が上手になるようにと願って筆と命名した。また「安々と海鼠（なまこ）の如き子を生めり」と一句詠んで大いに喜んだ。吾輩は高等官５等に任じられた。しかし吾輩の良き相談相手だった山川信次郎[14]が一高に招かれたのを非常に心苦しく思ったが止むを得なかった。吾輩はまた英語主任になった。森鷗外が軍医学校長から第12師団（小倉）の軍医部長に転属し小倉に赴任した。実際は左遷（させん）ではないかと思った。寺田寅彦が五高を卒業し、東京帝国大学理科大学物理学科に合格した。

喜ばしい事この上ない。明治天皇が東京帝国大学卒業式に行幸され、優等生に銀時計を与える。これが恩賜の銀時計の始まりであり、大正７年（1918年）まで続き卒業生415名のうち22名に与えられた。昔からあったら吾輩も銀時計組だったかも知れない。なにしろ１番で卒業したのだから。もっとも文科大学英文科卒業生は吾輩１人だったが。さて、９月に一高に赴任が決った山川信次郎と阿蘇に旅行した。この時の旅行はのち『二百十日』の素材となった。

寺田寅彦が東京帝大に入学し、上京するにあたり正岡子規への紹介状を与えた。寅彦は東京帝大では田中館愛橋、長岡半太郎に学ぶと云う。この年はじめて東京電信郵便局で暮の12月20日より30日まで年賀郵便の特別扱いをする事になった。同僚の桜井房記（五高工学部長）の勧めで加賀宝生から謡（うたい）を習う事にした。この年は赤痢（死者23,763名）、肺結核（死者66,408名）が流行した年でもあった。

明治33年（1900年）、吾輩は34歳になった。春にまた転居する。相撲の吉田司家の近くで、階下は10畳、６畳、３畳、２階は８畳、４畳だった。子規から娘、筆の初雛に三人官女が送られて来た。

浅井忠[22]（洋画家）が神戸から神奈川丸でフラン

スに赴いた。4月、吾輩は教頭心得を命ぜられ、校長中川元は第三高等学校に転じ、桜井房記が五高校長になった。5月に突然に英語研究のため満2年の英国留学を命ずると文部省から吾輩に通達があった。文部省第1回給費留学生だ。現職のまま留学費は年1800円、留守宅に休職費年300円だった。吾輩は考えた。もっと他(ほか)に適当な人がいるのではないか。また吾輩は英文学をしたいのであり、英語研究ではないので上田万年㉓（文部省専門学務局長）に問い合わせた処、留学の目的は幅広く解釈して宜しいとの返事をもらった。そこで吾輩は辞退する事もなかろうと思い留学する事に決めた。6月になり正式に文部省からイギリス留学の辞令が届いたので妻鏡、娘筆と3人で熊本をあとに東京に発(た)った。無一文だったので義父中根から100円借りた。さっそく子規を訪ねた。寺田寅彦は東京帝大の物理学科の大学院に進み、実験物理学を専攻していた。森田草平㉔が第一高等学校に入学した。8月に学士会館でイギリス留学の送別会があった。土井晩翠㉕も出席していたようだ。9月イギリス留学出発に際し、「秋風の一人をふくや海の上」の一句を寺田寅彦に送った。この句は短冊に書かれて留守宅の額に収められていたが、イギリスから帰国した際破り棄てた。こうして吾輩は9月8日ドイツ汽船「プロイセン」号で横浜港をあとにした。同行した留学生は藤代禎輔⑩（独文）、芳賀矢一④（国文）、稲垣乙丙（農学）、戸塚機知（軍隊医学）等で吾輩だけイギリス留学で他の人達はドイツへの留学だった。高山樗牛も同行するはずだったが喀血のため中止になった。

注：人名①～⑲は神皮No.11、P20～21参照

⑳ 寺田寅彦　東京帝大物理学科卒、東京帝大教授、学士院恩賜賞受賞、独英留学（明治42～44年〔1909～1911年〕）。物理学者、随筆家。筆名吉村冬彦、俳号藪柑子。

㉑ 坂元雪鳥（本名白仁三郎）　東京帝大国文科卒。吾輩の朝日新聞社入社の際の交渉役となった。「東京朝日新聞」の記者。能楽評論家。

㉒ 浅井忠　吾輩がロンドン留学中に同宿したことがあった。『吾輩は猫である』の中、下篇の挿絵を画いてくれた。洋画家。

㉓ 上田万年　東京帝大和文学科卒、東京帝大教授。吾輩の博士辞退問題の時好意的に吾輩の意見を文部省に伝えてくれた。国語学者、文学博士。

㉔ 森田草平　東京帝大英文科卒、法政大学教授。ロシア文学に興味を示し、吾輩の門下生としては異端児だった。平塚らいてうと有名な「煤煙事件」を起した。小説家、翻訳家。

㉕ 土井晩翠　東京帝大英文科卒。詩集『天地有情』、『荒城の月』を作詩。文化勲章受章。吾輩のロンドン留学中にしばらく同宿。詩人、英文学者。

おどろきモモの木クリニック・パートX

宮本秀明●神奈川県立がんセンター皮膚科部長

1。ある日のインフォームド・コンセント

「良性ですよ。病名は『脂漏性角化症』でした」と病理診断結果を書いたメモを手渡しながら説明すると「ひろう（疲労）せい？大して疲れちゃいませんが」と怪訝(けげん)な顔。「ひ」と「し」の区別が付かないのかね、この人は……。思わず「江戸っ子だってねえ、鮨食いねえ」という衝動を抑えて「『しろうせいかっかしょう』と読みますが、別に皮膚から脂が漏れる訳ではありません（こう言わないと翌日から脂質の食事制限をする人がいる）」患者「じゃ、何

故そんな名前がついているんですか」M先生「緑色でも黒板です。CDしか売ってなくてもレコード屋です」患者「ふーむ、なーるへそ」。

JR厚木駅も小田急厚木駅も海老名市にあり、厚木市にあるのは「本厚木駅」である。「米軍厚木基地」も厚木市に無く、綾瀬市にある。実態と名称の乖離ってのはしばしばあるものだ」……というわけで、迷医の誉れ高いM先生の診療は今日もまた続く。

2。可能姉妹

某週刊誌によると叶姉妹の姉の方は秘所にtattooを入れているのだそうだ。あんなところに針刺したらばい菌が入らないだろうか。ブドウ球菌でも入って毒が全身にまわって死んじゃったら、これが本当の「化膿終い」なんちゃって。

3。スパイ大作戦

某新聞の投書欄に以下の記事が載っていた。「××病院で手術を受ける際、執刀医師に△△万円差し出したところ黙って受け取った。その病院の受付や廊下には『職員への金品の供与は固くお断りします』と張り紙がしてあるのにおかしいではないか」……??　そう思ったら金品を渡すな。そもそも規則を守ってないのはどっちなんだ。ひょっとすると、この人はCIAの囮捜査官かい。

4。ホームページサーフィン

皮膚科のクリニックでもホームページ（HP）流行である。早速インターネットで某女医さんのHPに繋いでみた。診療時間、場所、学歴、職歴……ここまでは予想したが、ガビーン、院長先生のアップ写真登場である。美貌（?!）に思わず目が眩んだので閉じ、別のクリニックに移った。

5。Suica

スイカップで名を馳せた某局女子アナは、民放初登場の「世界ウルルン滞在記」でなんと「乳搾り」をするというので妙な想像をしてしまった。が、蓋を開けてみれば農家で日常見られる光景であった。でも視聴率は良かったようだ。

JR東日本のカード、Suicaは財布に入れたままでも機械に触れれば改札を通り抜けられるので小生も愛用しているが、さらに駅内のコンビニ店でも使えるようになったので益々カード枚数は増えるだろう。この際、いっそのことSuicaからSuicup cardに名称変更し、「ミルクとヌーブラは3割引」という風に売り出したら「売り切れ続出」てな事になるかも。

6。付き合いにくい後輩

「昔はB29ってのがあってな」と話せば、「随分濃い鉛筆ですね」と答える。またある時は書類を手渡しながら「これB4でコピー頼むよ」と言えば10分後に疲れたような表情で「このビルは地下2階（B2）までしかないんで、B4ではコピー出来ませんでした」と答え、ファックスを頼めば同じ動作を4～5回繰り返した挙句「ちっともこの原稿向こうに届きませんね」などと平然と言ってのける。開いた口がふさがらないが、あちらも付き合いにくい先輩と思っているに違いない。

7。再デビュー案

今時の歌手は名前が覚えにくい。×山○太郎なんてのは少なく、BoA、Zard、Garnet Crowだの意味不明である。パソコンソフトのEXCELかと思ったらEXILE（エグザイル）だったし、「スキマスイッチ」に至っては「ワケわかんなーい」。

パズルみたいのもあり、0930で「奥様」ってのにも苦笑したが、UAで「ううあ」にも参った。175Rで「イナゴライダー」なら、黄金のマスク被ってバイクに乗って登場すれば「ツタン仮面ライダー」てか。

それからどう見たって東洋人にしかみえないのにAlKO、TERU、TETSUYA、YOSHIKI、ISSA（抗がん剤みたい）とか、やたらローマ字にする。小生だって横文字にすれば「HIDE」とX-JAPAN並になるのだ。こうなりゃ、病院勤めを辞めてHIDEでデビューするか（グループ名はSEX-JAPAN）。

8。アテネで会ってね。

「熱海で会ってね」てのが昔、五月みどりの唄にあったが、アテネで金メダル16個もとれたのには驚いた。中でもドーピング疑惑で繰り上がった金メダルは劇的だった。聞くところによると、ドーピング検査部屋は鏡張りで、尿が局所から実際に出ているところまで確認するってんだから、かいくぐるのも難しい。アヌシュ選手は証拠を消すために尿をアヌスに隠していたとも報道されたが、これが本当なら検

査官を水戸コーモンにでも任せなければならない。「す消さんや、隠さんや」とか言いながら検査し、怪しい素振りを見せたりすると「このイン○ウが目に入らんか」とどやし付けてくれるかも知れないが、もし相手が女子選手で「目にハイラン日」などと答えたりすると、ちょいと返答に困るが……。

9。人の金なら湯水の如く

狭い国土に高速道路、新幹線が網の目のように張りめぐらされようとしている。便利になるのは結構だが採算取れるのだろうか。

巷では戦艦大和、青函トンネル、伊勢湾堤防を「昭和３馬鹿査定」と呼ぶのだそうだが、戦艦大和とともに海の藻屑と消えた英霊がこれを聞いたら浮かばれまい。伊勢湾台風では5,000人以上死んだが「堤防さえあれば死なずに済んだのに」という思いで造られた堤防のさらに外側にも住宅地が造られたし、青函トンネルにしても航空機がこんなに発達した今日、英仏トンネルの価値と比べるべくも無い。未来を予測するのは本当に難しい。今から10年後、××新幹線は今日も空気を乗せて走り、田舎の山を切り開いた○○高速は「空(あ)くわライン」に成り下がる。一等地にある公団の保養所は閑古鳥が鳴いて叩き売りである。「平成３馬鹿査定」が叫ばれる日も遠くない。

10。セカチュー

『世界の中心で、愛をさけぶ』代わりに、「日本の片隅からギャグを飛ばし」続けて、このシリーズも、はやパートX。

年金に関し「政界の中心から未納を叫んで」辞職する羽目になった大物政治家も沢山いた。また国会での追及に「随分世話になりましたが実にいい社長でした。いつかお墓参りにいきたい」と言った直後にその社長が健在である事が判明し「いい人は長生きする」とフォローした「人生いろいろ」政治家もいた。吉本のギャグも真っ青である。この分ではまだまだ人気は続き、任期も続く……かも知れない。

本当に「いい人は長生きする」のだろうか。昔『悪い奴ほどよく眠る』というクロサワ映画もあったし、30年くらい前『善人は若死する』という短編集を出した新進作家もいた。この作家は妙な売り出し方をした様にも感じたが、その後、名を聞かない。

今年は台風が次々に押し寄せてくるし、でっかい地震は起こるし、集団自殺は流行るし、景気も思うようには回復しない。気を取り直してサトエリの『キューティハニー』でもみて元気出そうっと。実写版『けっこう仮面』ならさらに元気百倍かも。

『聴く耳』をもつこと

＊

橋爪鈴男

（１）話①

ある時、メロンパンとジャムパンと食パンが走っていた。ジャムパンは足が遅かったので、ジャムパンは前を走っていたメロンパンと食パンに「待ってくれ」と声をかけた。ところが、メロンパンはそのまま走っていったが、食パンは「何だ。どうした」と立ち止まってくれた。

なぜか？

答えは食パンには「ミミ」があったからである。

（２）話②

ある時、私の科に１人の入院患者さんが入ってきた。その患者さんは難病の皮膚疾患であり、病変部位は紅く腫脹していた。日頃、周囲の人たちから、「エイズ！」「汚い！」などと、謂れ無きバッシングをうけていた。後日談であるが、入院当初、その患者さんは、入院していた病棟から飛び降りることだけを考えていたそうであった。しかし、実際には飛び降りなかった。

なぜか？

それは「先生がよくしてくれたからです」とは、その患者さんは言わなかった。

実は、当時、その患者さんには看護学生さんが、看護実習として数週間毎日付き添っていた。実習は

患者さんの話を聞くことから始まるので、その看護学生さんもよく患者さんの悩みを聞いてくれたそうである。
「そのお陰で助かりました。あの学生さんは命の恩人です」。

以上の話の①は単なる寓話であり、②は実際に私の経験談であるが、両者に共通するのは『聴く耳』をもつことの大切さである。

この世の中で病気の大小はなく、健康でありたいのは共通の願いであるが、特に難病や原因不明で治療そのものに効果的な方法の無い場合、患者さんの悩みは深く、広く、患者さん個人々々でその悩みも異なる。すなわち病気そのものに対する不安ばかりでなく、その病気による２次的な不安や不満あるいは心配事が生じてくる。例えばその患者さんが幼少児であれば同年代の健常児との違いに不安や不満が生じるであろうし、たとえ大人であってもその病気の発症が若年から中年の場合では帰宅すれば子供はまだ小さく、教育の問題が残っている可能性もある。家のローンも有るかもしれない。職場ではまだバリバリの現役で一番成熟している時期であり、健康であった時の思い出がストレスになるであろう。一方患者さんが壮年期から老年期の場合は子供についての心配は無くとも夫（妻）の健康状態や体力が心配になってくる。

このような不満や不安感を持っている患者さんにとって共通していることは「『自分の悩み』を聴いてもらいたい」という願いである（この場合の『きく』は『聴く』である）。つまり、患者さんが話したいのは「自分の悩みを話すことで自分の病気を相手に治してもらいたい」のではなく「自分の苦しみの内容」を分かってもらいたい、つまり「苦しみに悩んでいる」あるいは「悩んでいることに苦しんでいる」ことを分かってもらいたいのである。ところが、そのような訴えを聞かされた相手は必死にその問いに対する適切な答えを求めて悪戦苦闘し、良い返事ができないために、「私には分からないから今度専門の先生に聞いてみて」とか「そんなこと聞かれても困る」と答えてしまう。しかし、患者さんは決してこの言葉を望んでおらず、むしろ何も話さず黙って抱きしめてもらう方がまだ患者さんは救われるのである。

特に長期入院患者さんの中には、２次的な悩みが解決しないために3次的な本当の『心の病』が併発してくることがあるのも事実である。

三重苦で有名なヘレン・ケラーは「障害のある耳、目、口のなかでもし１つだけ健康になれるとすると、なにを望むか」と聴かれた時、「耳が欲しい」と答えたそうである。これも聴くことの重要性を示すよい例かもしれない。

現在、日本の医師の数は約20～30万人と推定されている。一方パーキンソン病の罹患率は人口10万人あたり100人である。単純計算で言えば日本の医師でパーキンソン病の患者は200～300人ということになる。この数を多いと考えるか、少ないと考えるか、難しいが、少なくとも私の周囲の同年代の人達にはパーキンソン病の患者さんはいない。この貴重な体験をしている者として、白衣を脱いでパジャマに着替えた者の代表者として「患者のもつ心の苦しみ」「聴く耳の重要性」をお伝えしたかったのである。

日々の忙しい診療の中で『聴く耳』のことを一瞬でも思い出していただければ幸せです。